

市川正孝氏の思いでー青春、野球そして長崎ー

長薬野球部同窓会会長
昭和33年卒業 西脇 金一郎

市川氏が亡くなる2ヶ月前の10月下旬、病床見舞を兼ねてインタビューのため大学病院を訪問した。翌年の3月に予定されていた退官記念誌に友人代表として「市川氏の人となり」を書けとの依頼があったためである。その日はご機嫌であった。ベッドサイドの肘掛け椅子に座って約30分間、小生の質問に応じてくれた。静岡県浜松市で生を受け、満州の国民学校で終戦を迎える、引揚げ後、別府市から長崎に落ち着くまでの波瀾のドラマを拝聴した。引き続き中学校・高等学校・大学時代の野球物語を語ってくれた。短い時間であったが、今、思い起こすと、彼も何かを思い出すように話していたのが印象に残っている。その時の話の内容が小生の「友人代表の弔辞」になってしまったとは知る由もなかった。

不思議なものである。今回、原稿執筆依頼があって、たまたま「柏葉健児」の中に資料を探していたところ、1986年版「背番号9」（以降中止している）に市川氏の特別寄稿「青春、野球そして長崎」があった。読んでみると、小生がインタビューで質問し、市川氏が語ってくれた内容が更に詳しく載っているではないか。更に、甲子園に行けなかったことが、今日の市川氏の円満なる人格・栄誉ある業績を築いた事を知り、改めて「青春、野球そして長崎」が彼の人生を運命付けていたのだと気づいた次第である。小生が多くを語るより、彼の以下の言葉を聞いていただきたい。



昭和32年当時の野球部



3番サード市川

「長崎は第二の故郷として青春時代はもとより、昭和21年満州、奉天市から引揚げ、佐古小学校6年生の3学期、大浦中学(第1回生)、長崎東高(第5回生)で学んだ思い出深い地です。昭和25年より1年生3塁手として、長崎東高硬式野球部にデビューしたときから、人生にとって野球が全てとなりました。高校野球での甲子園出場は何にも優る勲章ですが、私の

時代には実現されませんでした。高校2年及び3年生では二代目の歴代遊撃手として日夜練習に励み、プロ野球や実業団野球でのプレーを夢見たこともあります。丁度、セ・パ両リーグがスタートした時期もあり、或程度、野球ができれば誘いの手が伸びてくるような気がして野球に望みを託した時代でもあったと思います。高校3年は野球の内容がチームにとって充実した年でした。九州地区代表決定戦まで勝ち進み9回裏相手チーム(長崎西高)の勝越しランナーを2塁、3塁に置いて三遊間寄りのショートゴロをとうとう一塁へ暴投してしまいました。全て私の責任で代表権は失われました。人生が真っ暗になり、チームメートに詫びる言葉もなく、自殺したい気持ちでした。もう野球は決してやるまいと思いました。三菱造船、大洋漁業や大学からの勧説を断わり浪人生活に入りました。青春から野球が消えたとき本当の自分をよりもどすのに時間がかかり、母の慰めなど全く役に立たなかったほど荒れ狂ったときがありました。今想えば、あの暴投が私の人生を変えてしまったのです。もし博打のような野球に将来を賭けていたら、現在の私は無かったでしょう。

昭和21年7月、母と共に引揚者として日本の地に上陸したとき、故郷を離れ別府に永住を求めたこともあります。当時、別府には駐留米兵と街娼が満ちており、母はいち早く長崎への移住を決意したのです。これも私にとっては、不良への脱落から逃がれた母からのラッキーなプレゼントのように思えてなりません。転ばぬさきの杖が節目にあって、やっと今日の50代になったのかもしれません。（後略）」

最後に小生が弔辞の中で市川氏に捧げた無念の言葉をご紹介して終わります。
「大学同期の男性軍の中で市川さんほどナンバーワン的素養の多い方は居ません。出席簿の名簿順で一番、男前で一番、結婚も一番早く、海外体験の期間も一番、はしご酒も一番、野球のうまさは勿論1番、肩書きのつく仕事も1番、今日の医薬分業のさきがけを作ったのも1番…、このような1番づくしの市川さんがなにも冥土への旅立ちまで1番で締めくくる必要はなくても良かったのではないかですか。」

合掌

青春の思い出ー故市川正孝兄を偲ぶー

昭和33年卒業 角田 正之

ここに一枚の写真がある。私達が大学2年の時、正確には昭和三十年五月、福岡平和台球場で開催された西日本地区大学野球選手権大会に出場した時のものである。当時の長大硬式野球部は各学部より選抜された選手で編成されていて、我が薬学部からは市川、西脇と私の3名が入り、ほかに学芸学部（現教育学部）から3名、医学、水産、経済の各学部から夫々2名がこの大会に出場した。（当時のメンバーは全員で約20名であった。）

チームの実力は当時の九州地区国公立大ではAクラスで、確かこの大会の2回戦で福岡商大（現福岡大）に快心の勝利をおさめたことからしても最強のメンバーであったと自負しています。



昭和30年5月、福岡平和台球場で開催された西日本地区大学野球選手権大会
前列左から二人目が市川、右から二番目が西脇、後列中央が角田

市川兄は2塁手で2番バッター、西脇さんは外野手、私は一塁手か投手でした。当時の市川二塁手は軽快で堅実な守備で幾度となくピンチを救ってくれたし、打撃ではシャープな打法で左右に打ち分け、チャンスメーカーとして存分な働きをした名手でした。また、薬学部のチームでは三番ショートで私が投手で試合の途中で打ち込まれたピンチに名リリーフをし勝利を勝ち取ったことがしばしばでした。このようにチームは学部対抗戦や熊大との定期戦では殆どの試合で負けたことはなかったと思います。

市川兄と私は全長大、薬学部のチームのメンバーとして4年間共に一緒にプレーをし、勝利の感激と敗北の屈辱を分かちあった得がたい友人でした。私が大学時代から今日までの40有余年の間、市川兄から学び教わったことは数多くありました。特に彼はいつも明るくプラス指向で全てのことを素直に受け止め、日頃からの切磋琢磨の努力をしてチャンスを的確に生かしピンチには辛抱強く冷静に防ぎ、それこそ多くのことをスマートに確実に実行されて大きな成果を上げられていたことを私は教わったと思います。

天地の悠久に比べ、市川兄と共に過ごした年月は寸陰の間かもしれません。彼が生きた65年の人生は並々ならぬ努力をもとに明るく楽しく常に前向きで充実したものであり、このことがあとに残った私共の生き方の指標として永久に輝き続けるものと確信します。

最後にこれまでの御交誼、御指導、友情に対して心からお礼を申上げます。

故渡辺三明さんのこと

昭和33年卒業 角田 正之

渡辺さんとは長薬野球部のOB会ではじめて出会い、それから約30年の長い間お世話になっていましたが忽然として幽明境を隔てることになり、ただただ痛恨の極みです。これからもずっと存命で益々OB会などでご指導、ご活躍を願えたものをと天の無常を感じざるを得ません。彼の熱い思いとゆまぬご努力が今日のOB会の発展に大きく寄与したことは偉大であり、彼の意志を私共一人一人が引き継ぎ永遠に不滅のOB会にすべきものと決意しています。

市川先生を偲んで

昭和33年卒業 工藤 二郎

市川さんと渡辺さんの想い出を残したいから、写真等をお貸し願いたいとの手紙が野球部から届いた。市川さんの、学生時代の写真なら相当数撮っているので、何とかなろだろうと思ってフィルムを探してみた。

カラー写真はまだ普及していなかった。当時の写真は黒白の要素で何かを表現しなければならない。光と影、その諧調の美しさ、及び構図の面白さが相俟って優れた写真がつくりだされる。市川さんは、これらの要素をすべて備えた人だったと思う。彼が光り輝く人物であったことは誰もが認めている。しかし、その輝きは彼自身が持つ影によって、弥増したように思えてならない。だが彼はその影を人に気付かせることはなかった。

市川さんは、私より一週間早く生まれた。昭和一桁最後の双子座である。共に戦後間もない頃父親を亡くし、母親の手で育てられている。彼が奉天から引揚げて最初に住んだ別府市・野口は、私のホームグラウンドである。環境が似てくると考えも似てくる。言葉に出さなくとも、何かを判り合える友であった。先ずは、晴れがましい舞台にいる市川さんの写真をと思ったが、見つからない。晴れがましくない私が、そんな場所にいる筈がないから仕方がない。そうだ！例外

があった。九連連を結成した

時は一緒に活動した。あの時の写真がいい。当時は熊薬との交流しか無かった。九大も交えた組織を作ろうと、市川さんを中心にして西枝海先生（九大薬・長崎薬兼任教授）を頼って話を進めた。結成式の時、私は流感で高熱を出していたが、愛用の二眼レフで三大学結束の瞬間を撮り



続けた。

市川さんが、その後に九大で勉強し、井口先生を知ったのも何かの縁だろう。彼は出会いを大切にする人であった。その九葉連結成時のフィルムが一枚もない。どうやら、関係者に貸したままになっているらしい。野球部からの写真要請にはCD-Rで渡そう。返却不要。便利な世の中になったものだ。

市川さんは秀でたスポーツマンである。奉天ではスケーターとして、帰国後は陸上スプリンターとして、そして中学時代から野球の名手として名をあげてきたと聞いている。長崎東高では一年生からレギュラーを張ったという。私も野球が好きだから、一年生の時から応援に行った（大分県の山峡の高校・・連戦連敗で廃部となった）。一度ユニフォームを着て球投げをしてみたいとの念願が適ったのは薬学の二年になってから。今泉先輩が四年生で、球拾いをしろということで入部させて貰った。初めてグランドに出た時に驚いた。市川さんの送球が曲がってきて捕球出来ないのである。右へ・左へと予測もつかない、切れの良い変化球をスピード豊かに投げてくる。練習試合で市川遊撃手からの一塁送球を顔で受けたことがある。確信をもつて出したファーストミットの横から突然ボールが現れ、顔面を直撃した。私の顔が変形したのは、そのせいだと思っている。

市川さんは太洋漁業や三菱造船から声が掛かるほどの遊撃手であった。軽快なフットワークと球捌きは流石と唸らせるものがあったが、恐怖の送球だけは何とかして欲しかった。捕球すると殆どステップせずに、スナップを効かせてピュッと投げたボールが突然曲がりだす夢を、今でも見る事がある。彼のバッティングも一流だった。殆どの試合は一番・西脇、三番・市川、四番・角田の打順が組まれていたと記憶する。西脇会長は選球眼の良さと走塁の上手さが際立っていたし、角田さんの長打力は天性のものがあった。しかし中距離打者の市川さんには確実性という大きな武器があつて、抜群の信頼性を誇る中心打者であった。



ユニフォームの着こなしも上手かつたが、普段もお洒落だった。彼の家の近くに長谷川シャツという専門店があり、夜の遊び着はここで眺めて作った。私も付き合って作ったが、同じような物を着ていても、彼だけがモテテいたような気がしてならない。

「昭和32年度学友会予算書」が手元にある。褐色に変色したB4判の紙2枚にガリ版刷りでぎっしり書

き込まれている。体育部活動費総額4万200円を野球班・籠球班・山岳班・庭球班・卓球班で取り合っている。野球班代表者は市川さんで、爽やかな弁舌と対外試合の実績を武器に16950円をゲット、もちろん最高額である。内訳は ボール2打3600円・バット15本6750円・グローブ4600円・キャッチヤメン2000円となっている。文化部活動費は2万3000円で写真班・映画班・音楽班・新聞班・文芸班で取り合って、私が代表の写

真班が最高額の6000円を獲得している。特別奨学金3000円の時代である。

当時、殆どの野球部員は熊本遠征を楽しみにしていた。伝説となっている「文化劇場」・味噌天神にあった居酒屋「紫煙」・鶴屋の近くにあったキャバレー「黄金の腕」・デートには喫茶「山小屋」など楽しい場所が沢山あった。その熊大薬学部に市川さんが転出したのは昭和37年である。その二年後に、私も会社の命で熊本に赴任して、新築されたばかりの市川邸から数分の所に家を借りた。その時、初めて市川夫人・則子さんにお会いしたが、スラリとした美人で、何故かホッとしたことを覚えている。厳格な「おばあちゃん」(市川さんの母親を我々はオバアチャンと呼んでいた)も元気で、私の妻や子は勿論、偶にやってくる女房の母親もいろいろと人生の教えを受けた。

昭和41年、市川さんが熊大薬学部助教授になられた年に、角田さん、西脇さんも集まって熊本で遊んだことがある。阿蘇・湯之谷のゴルフ場でプレイしたが、当時ゴルフをしなかった市川さんも一緒に回って写真を撮ってくれた。それを自ら暗室に入り、四つ切に伸ばしてくれた。今も大事にしている。昭和57年、福山大学に薬学部が開設され、教授として招聘される。医療薬学の道を模索する傍ら野球部を指導し、全国学生軟式野球選手権大会に2度出場している。昭和60年、長崎大学医学部教授として帰って来てからの活躍は、ご承知の通りです。

平成12年8月18日、長崎自動車道・川登PAでバッタリお会いした。盆休みを終えて、昼からの教授会に出席すべく、帰路を急がれているところであった。顔色もよく、「退官後はしばらく静養するつもり、それを楽しみにしている。」と語っていた。横にいた奥さんが嬉しそうに笑った。西脇さんから「8月31日、市川さんが緊急入院された。」とEメールが入った時は信じられなかった。何一つ病気したことのない人、十日前はあんなに元気だった人が何故？

入院中、一度だけお見舞いする事ができた。枕元の机上に赤い野球帽があった。



平成5年野球部OB会
親睦試合前の記念撮影
中央の赤い帽子が市川教
授、右隣の白いユニフォー
ムは昭和9年卒業の野口
繁一先輩。試合で2人は
バッテリーを組んだ。